自立活動における感覚と運動の高次化理論の活用（４）

企画者　高橋浩　（奈良県立奈良養護学校）
司会者　高橋浩　（奈良県立奈良養護学校）
話題提供者　長洞萌美（淑徳大学発達臨床研究センター）
深田竜一（奈良県立奈良養護学校）
指定討論者　野口明紀（山陰発達と学びの研究会）
池畑美恵子（淑徳大学発達臨床研究センター）
下山直人（筑波大学人間系・附属久里浜特別支援学校）

KEY WORDS: 感覚と運動の高次化理論、自立活動、教材活用

【企画趣旨】

淑徳大学発達臨床研究センターにて三十数年にわたる臨床研究の中でまとめられた感覚と運動の高次化理論（宇佐川,2007）を、特別支援教育、特に自立活動の中でどのように活用していけるのかについて話題提供していきたい。この理論では臨床研究に基づき、発達を４層８水準に整理して捉え、それぞれの水準の発達的意味やつながりを明確に整理している。さらに、それぞれの水準や課題に対応する具体的指導手順や内容を示し、その際利用する教材・教具についても、分かりやすくまとめられている。

自立活動の指導は、障害による個々の課題や難しさに対応していくものであり、特別支援教育の中核と考えている。ここでは、自立活動の中でも認知面の発達に焦点を当て、感覚と運動の高次化理論を活用した発達的視点に基づく学習支援のあり方について検討する。

【話題提供者の趣旨】

事例報告１

本報告で取り上げる事例（A 児）は 4 歳台より 2 年間、教材・教具を用いた個別学習と、小集団での音楽･運動療法を受けた。動作模倣は芽生えているが、物への関心は狭く、要求や不快は泣くか頭を叩くことで訴えるなど表出手段も少ないことから、発達初期段階と考えられた。障害児の認知発達を支援する方法として、教材･教具を用いて個別的にかかわることは近年普及されはじめ、その有効性が示されつつある。A 児の場合、一定時間着席姿勢を保持し、入れる･はめる終点の学習をやれているにもかかわらず、頭を叩いて怒る様子があった。そのため学習場面の見直しを行い、難易度を下げ、A 児が繰り返しやろうとする物の取り出し遊びや乾杯遊びを学習の中心に据え、そこにセラピストが充分にかかわること、受動―能動の相互的やりとりをすることに重点に置いた。すると 2 年目後期には、入れる･はめる終点の弁別学習に嬉々として取り組めるようになり、身振りサインで意思伝達する姿も見られるようになった。教材の達成度を評価するばかりでなく、学習場面を丁寧に振り返り、行動の示す発達的意味を理解したうえでかかわることが大切であると学んだ事例であった。A 児の 2 年間の経過を映像もまじえて報告したい。　（長洞萌美）

事例報告２

緊張が強い自分の身体と向き合い、緊張を乗り越えて学びを楽しむことができるようになっていった B くんは、感覚を入力することそのものに対して、防衛的な過剰反応を起こしてしまう。移乗や臥位姿勢など姿勢変換でさえも、少しの傾きが変わることや、少しだけの接触でさえも過剰に防衛反応が働いてしまい、過緊張となる身体である。自分の思いは持っていてもそれを表現するために必要な運動を起こそうとすると、思いとは違う動きとなってしまい自分の予想と違う姿勢の組み立てによりさらに、過緊張となる。そこへ外的な刺激が加わればたちまち過緊張状態となり、身体は弓なりのように反りかえる B くんは、教材を使った学習以前に課題へ向かうための心の構えと身体の構えが整わない。B くんにとっては迷惑な活動だったかもしれない取り組みを振り返りながら、心身ともに発達を促していきたいとの思いだけで突き進んできた 4 年間の実践を今一度振り返り、その時には見えなかった事象や分からなかった事象が見えてきた内容を報告しながら、初期発達の児童にとっての感覚と運動がつながる重要性や、身体・姿勢と情緒、自己像の観点が認知発達を支える基盤とである事を中心に、感覚と運動の高次化理論を発達的視点として取り入れ、A くんの持つ困難さや状態を肯定的に捉えながら初期発達の児童の学習を検討していきたい。（深田竜一）

【指定討論者の趣旨】

１　この 2 事例は、どちらも学習上或いは生活上の課題が一見明確に見えるが、表面的な課題にアプローチするだけでは困難さの改善が難しかったと考えられる。この二人が、ちょっとした手掛りを機に、大きな変化が見られるようになるが、それまでの経過や背景も含め、何がどのように変わったのかを検討する中で、必要な要素について探りたい。（野口明紀）

２　感覚と運動の高次化理論では特に発達初期段階ほど臨床的アセスメントを重視しているが、そこで目指す方向性は能力評価というよりも、子どもがどのような原則をもって外界とかかわっているかを臨床的事実から、絶え間なく確かめていく点にある。初期段階の子どもの臨床的アセスメントの実際とその課題について検討していきたい。（池畑美恵子）

３　感覚と運動の高次化理論を自立活動の指導で活用するとは，いったいどうすることなのか。教材を使った指導を行うことだけではなかろう。実態把握や指導計画作成，実践や評価にどのように活用できるのか，また，更なる活用のために何が必要なのか，話題提供を通して検討したい。（下山直人）

（文献）

「障害児の発達臨床Ⅰ、Ⅱ」(2007)宇佐川浩、学苑社
(TAKAHASHI Hiroshi、NAGAHORA Moemi、FUKADA Ryuichi, 、 NOGUCHI Akinori 、 IKEHATA Mieko 、 SHIMOYAMA Naoto)